

【トラック1】

3
場所…雨の道・夜

※雨の中歩いている主人公が、タマを見つける。

「え？ ああ……おれに話しかけてるのか……
こんなところで立ち尽くしてる男に声かけるなんて。
ずいぶんと不用心だね、お姉さん。普通は逃げたりさけたりしない？
今のおれ、ずぶ濡れでぼんやりしてて、完全に怪しい奴でしょ……」

※主人公「一体どうしたんですか!!」

「(へらへらと笑いながら) え
ん、どうしたのか聞く前に、
危険な奴なのかどうか聞いたほうがいいんじゃない？」

※主人公「危険な人、ですか？」

「えっ？……いやいや、まあ、聞いたほうがいいんじゃないとは言ったけども！
そのまま聞いてどうすんの(笑)」

「おれは、お姉さんがどんな人かわかった。
……とつても素直なんだね。
大丈夫、おれは決して怪しくも危険でもないよ。捨てられた動物みたいなもん。
これからどうやって厳しい世界で生きていこうかなあって
考えてたところなんだ……」

※主人公「どうしよう、雨だし……うちに来ますか？」

「えーっ？ 家に呼んでくれるの？
またまた不用心だね……心配になるよ。
ああ、でも今おれ怪しくも危険でもないって言っちゃったし……
変なことできないか……それじゃ、ついていってもいいかなあ？」

※二人で並んで歩き始める。

※主人公「何があったんですか？」

「別に？ 何も深刻なことなんかないよ……」

ただ、今まで一緒に暮らしてお世話になってた女の子に
追い出されちゃっただけ。以上。それ以上でもそれ以下でもない。
出て行けって言われたら、居座るわけにいかないでしょ？」

※主人公「そうだったんですか……」

「あー、でも別に友達以上恋人未満って感じだったから。
心が傷ついたとか、彼女が忘れられないってことはないから。心配しないで。
ただ、温かい寝床とご飯がなくなっちゃったなって……それだけ」

※主人公「名前を聞いてもいい？」

「うん？ ああ、玉屋。玉屋モトキです。

でも好きに呼んでもらってかまわないよ。

名前なんて、あつてないようなものだから。

昔の好きな人の名前とか、元カレの名前とか。なんでもどうぞ」

※主人公「それじゃ捨て猫みたいだし、タマって呼ぶね」

「タマか、いい名前だね……」

捨て猫みたいっていうのも否定できないしな。

玉屋のタマかあ……じゃあ……

おれがタマなら、お姉さんのことはミケちゃんって呼ぶね。

猫仲間になる」

※主人公「なんでミケ？」

「んー、なんとなくだけど。三毛猫っぽい、から？」

可愛くて純粹で、自分から人に近づいていっっちゃう三毛猫のミケちゃん。

どう？ やだ？」

※主人公「ううん」

「よかった、じゃあ決まり。
今日だけのご縁かもしれないけど。よろしくねミケちゃん。」

「とりえあず……ミケちゃんちであったかいシャワー浴びられると……
嬉しいんだけど……どうかなあ……?」

主人公「はい」

「やった!ありがとう。じゃあ、行こうか」

【トラック2】

8

場所…主人公の部屋・夜

「はー、さっぱりした……シャワーあったかかったよ。

体冷たくなって寒くてしょうがなかったから、助かったよ。

タオルも服もありがとう。

男物のTシャツがあるってことは……ひよっとして彼氏がいる?」

※主人公「あ、違うの。ライブTシャツ」

「ああ、ライブTシャツか。納得。

え、待つて。じゃあこれミケちゃん着用済み? えー匂い嗅いじやお。

(すんすんとシャツの匂いを嗅ぎ、叱られてふふふと笑う)「

※主人公の前に座るタマ。

「ええと。改めて……拾っていただき助かりました。ありがとうございます」

※主人公「追い出されたってどういうこと? 何があったの?」

彼女は心配してないの? 荷物は? あなたは——」

「あー待って待って。質問多すぎる。順番に答えるから、一気に聞かないで。おれ、すぐ混乱しちゃうから。ほら、猫ってさあ、一気に距離を詰められたら逃げちゃうでしょ？それと同じ。ちゃんと正直に答えるから。まずは、なんで追い出されたのか、だよね？」

「えーっつとねえ……
家の家主である……」

猫的に言えばご主人様の女の子に、セックスを何度も迫っちゃったの。それでもう付き合いきれないーって追い出されちゃったってわけ」

「さっきも言ったけど、
その家主の女の子とは友達以上恋人未満の関係だから。
だから…心配はしてないんじゃないかなあ？」

「元々の出会いも、
居酒屋でお酒飲んでたおれの顔を気に入ったとかで
家に置いてくれてただけだし。
うん、完全に飼われてた感じ。
でも、迷惑をかけたから追い出されちゃった……それだけのこと」

「本物の野良猫みたいでしょ？
追い出されて、行くところもないし何も持っていないから途方に暮れてたんだ。
ミケちゃんがおれを拾ってくれて助かったよ」

「おれね、セックス依存症なの……
ファンキーな言い方したら、セックス中毒？
ないと、ちんぼがムズムズしておかしくなっちゃうんだ。
ああ、でも安心して……女の子を無理に犯す趣味は一切ないから。
嫌がる相手を押し倒してしたことは一度もないよ。
ただ今回は……」

ちよつとうまくいかなかったんだけどね。」

※主人公「かつこいいから喜ばれそうなのに」

「んー……最初は喜んでくれるんだけどね。」

毎晩しようってベッドにもぐりこんでたら、さすがにうんざりしたみたい。
お姉さんは……ミケちゃんはエッチなことには抵抗ないタイプ？
見た感じ、すっごく純粹そうだけど」

※主人公「特には抵抗ないかな」

「ほんと？ 抵抗ないなんて簡単に言っちゃっていいの？
目の前にいるのはセックス中毒の、盛りがついたオス猫かもしれないのに。
おれ、ミケちゃんにも手出しちゃうかもよ？」

※主人公「いいよ」

「えっ、いいよって……
ミケちゃん、そんなおとなしそうな顔して案外エッチなの？
それとも自暴自棄とか？ だったら撤回したほうがいいと思うけど……
……本当に『いい』って思ってるの？」

「いいんだ……？
それなら……一つ提案があるんだけど」

「セフレ契約をしようよ。おれ、ミケちゃんが人肌恋しいなって夜とか、
エロいセックスしたいなって日は、とことん付き合う。
精子枯れるまでやれるよ。」

それに、ミケちゃんがイキすぎて失神しちゃうくらい、
おまんこ舐めてあげる。
好きなだけあって、まあまあセックスも得意だし。
ミケちゃんの心も体もたっぷり満たせると思う……」

「もちろん、おれは前回の反省を活かして無理に迫らないようにするよ。
野良猫に、たまーに餌をあげる感覚でいてくれるといいよ。
無責任に可愛がって、気持ち良くなって、放り出してくれてかまわない。
どう？ 悪い条件じゃないでしょう？」

「ただ、一個だけルールを決めさせてほしい。」

今からおれが言うルールに対しても、質問はナシ。
……おっけい？」

「今この瞬間から、ミケちゃんは何も話さないで。
……首は縦にしか振らないで。
変なルールだけど、おれは病気なの。
……こんな変なルールだけど、いい？」

※主人公「うん」

「ふふ、今うなずくしかできないなって思った？
ごめんね……おれ、ミケちゃんのこと気に入っちゃったから。
これからよろしく」

※タマ、ヒロインを抱き寄せる

「(軽く触れるキス) ちゅっ……楽しんでるね」

【トラック3】

199

場所…主人公の部屋・夜

「というわけで……せっかくシャワーも浴びたし。えっちなことしよっか？」

※主人公「えっ」

「しーっ……約束したでしょ？ 喋らない、って。
言葉なんて使わずに気持ち良くなる？
ベッド、のってもいい？」

※二人、ベッドに腰かける。

「あれ？ さっきはセックスに抵抗ないって言ったのに。」

急に恥ずかしくなった？ こっち向いて？ 可愛い顔見せてよ、ミケちゃん。大丈夫、拾った野良猫が毛づくろいしてくれてるんだって思えばいいから」

「ああ、可愛い顔……目えウルウルだね、ミケちゃん。

ふふ、口もギュって結んで……おれとの約束守ろうとしてくれてるんだね。いい子だな……でも喋らなければいいだけだから。」

※ここからタマのスイッチが入るので、声のトーンを落とし、慣れた感じで色っぽくお願いします。

「……口開けて？でなきゃ、エッチなキスできないよ……。」

「ん、ふっ、ちゃんと舌出して？」

力抜いてね……

全部委ねてよ。これから超気持ち良くなるんだから……」

「上手に舌絡ませてくれたね……はあ、キス顔トロトロですごくエッチ。口も開いちゃってるよ？ キスだけで気持ち良くなっちゃったんだ？」

「これからもっと気持ち良くなることしちゃうのに。

どうなっちゃうのか楽しみだなあ……ねえ、想像して？

おれにすーっごくいやらしいことされちゃうの。例えば――」

「ちゅ、れろっ、こんなふうにつ、ちゅっちゅ。

耳の奥に舌ねじ込まれて舐め回されちゃったり……ちゅちゅっ、ちゅば。

ふーっ……って息を吹き込まれたり、全身を舐め回されて。

敏感な部分も舌でたっぷり舐めたあとに吸い上げられちゃうんだよ。

最後は、奥までトロットロになるほど突き上げられるんだ……」

「あーあ、さっきより顔がだらしなくなってる……

エッチなことされちゃうの想像したんだ？

ミケちゃんって、気持ちいいこと大好きなんだね。

いいじゃん、おれと気が合いそう……仲良くやれそうだね？」

「こっち向いて？ もっと可愛い顔見せてよ……

Tシャツもスウェットも脱いじゃおっか？」

「ブラつけてないんだ？ シャワー浴びたあととはつけないの？
でもおれが同じ部屋にいるのに不用心じゃない？
それとも、こうなるってわかってた？」
悪い子だな……」

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅ。ちゅ、ちゅっ。
ちゅっ……ん、おっぱいすっごく柔らかくていい匂い……
揉みしだいたら、形変わりそうなくらいとろふわだね。
ちゅ、ちゅっちゅ……唇が沈み込んでいいそう。
あれ？ おっぱいはすっごく柔らかいのに、真ん中だけツンってしてない？
ほら、固くなってる……指の腹でスリスリ♡ってしてあげようか？」

※主人公「んっ」

「かわいい反応……ここ、敏感なんだ？
ミケちゃんは指で優しくいい子いい子って撫でられるのが好き？
それとも、爪を立ててカリカリされるほうが好き？
乳首カリカリ、カリカリ……あー、どんどん固くなってくる。
乳輪も膨らんで、ぷっくり乳首だね。やらしーねえ……？
ミケちゃん、これじゃまるでしゃぶってっておねだりしてるみたいだよ？」

※主人公「それ、は……」

「あ、」
「はあっ、ん、はーいミケちゃん。
しーっ。だめでしょ？ 喋ったら。」

「今だけはエッチな声なら許してあげる。
普段は絶対に喋っちゃだめだから。」

「ミケちゃんは黙っておれに気持ち良くされていけばいいんだよ……
油断していると、ぷっくり乳首美味しく舐め回しちゃうからね？」

「ん、ふっ、舐められるの大好きなんだね？」

可愛いね、ミケちゃん。本当に子猫みたいな声出しちゃって……
ふーっ、トロトロ顔でエッチな声で鳴かれたら……
おれも我慢できなくなっちゃう。

……下も舐められるの好き？ 足開いてよ」

※足を開く主人公。

「もう濡れちゃってる……」

キスして少し触っただけでこんな状態になっちゃったの？

ミケちゃんって敏感で濡れやすいんだ。

いいね、触り甲斐があるよ……

あー、濡れてるだけじゃなくて、割れ目もパツクリ開いちゃって。

ちようだいっておねだりしてるみたいだよ？

何が欲しいのか当ててあげようか……

熱くて太くて、血管が浮き上がっちゃってるカリデカちゃんぽでしょ？

入り口にあてがって、奥までぬるくって入って……

一番奥まできゅんきゅんしたいんじゃないの？」

「割れ目がヒクヒクしてる……想像してほしくなっちゃったんだ？」

「クリもピンって立ち上がって、割れ目から頭が出ちゃってるよ？

撫でてほしくて、主張してるみたい。じゃあ、無視は可哀想だよねえ。

けど、ミケちゃんすっごく敏感だから、ユユ軽く触るだけでもイッちゃいそう。

どうする？ ここは後のお楽しみに取っておく？

それとも思い切り撫で回しちゃう？ 好きなほうでいいよ……」

※主人公の性器に触れるタマ。

「あーあ、軽くかすっただけで腰浮いちゃった。

甘イキしたんでしょ？ ひと擦りだけなのに……

じゃあ、指で押しつぶすみたいのにゆるにゆるさせたら

どうなっちゃうかなあ？

……早速試してみよっか」

「あー、すっごく固くなってる。ピンと尖って、勃起してるんだね。

これじゃちゃんぽと変わらないよ。クリちゃんぽだね、ミケちゃん？

コリコリってするたび、腰ガクガクしてるの気づいてる？
あー、すっごいエッチ。

えろいねミケちゃん。

おれのチンポも反応してパンパンになってるよ。

ほら、スウェット盛り上がってるでしょ……

せつかくシャワー浴びたのに、欲しくて我慢汁こぼれちゃう」

「クリ、思いっきりしゃぶってあげるね？」

ふふ、興奮と、どうなっちゃうんだろうって不安でグチャグチャの顔最高……
興奮する……」

「はあ、ん、コリコリだね……」

唇すぼめて、チューチューって吸ってあげる……ん、逃げようとしてもダメ。
腰抑え込んで、おまんこの奥にも舌ねじ込んであげるから……」

「はあ、んん、すご」。

お尻のほうまでエッチな蜜流れちゃってる……
ん、ふっ、おまんこの入り口もヒクヒクしっぱなしだね……」

「もうおまんこ欲しくて欲しくてしょうがないんだもんね？」

舌だけじゃ届かないところ、優しくトントンってしてあげなくちゃ。
待って、おれも全部脱ぐから」

※服を脱ぐタマ。

「はーっ、もう勃起しすぎて痛てえー……んっ。

ああ、ブルン♡って飛び出しちゃった。

竿、血管バキバキに浮き上がっちゃってるでしょ？

カリも膨らんでおつきくなってるし……

見て、これでミケちゃんが一番奥を気持ち良くするからね？

おれももう待ちきれない……早くミケちゃんの中に入って、腰振りたい。

ゴムは……え、あるのお？ エッチ！（笑）ありがとう」

※避妊具のパッケージを破り、身に着けるタマ。

「ん、ふっ……はーっ……へへっ、今、触るだけでヤバイかも……」。

んっ、はーっ、お待たせ。準備できた。ん、(独り言のように)「ここね……」

※正常位の体勢で挿入する。

「はーっ……奥まで入っちゃった……」

んん、すっご、キュウキュウ締め付けてくる。

ミケちゃんのおまんこ、すっごい甘えんぼさんなんだ……可愛い。

くっ、ん、また締まった……早く動いてって言ってるの？

ワガママだなあ」

「でも、いいよ……おまんこで喋るのは許してあげる。

ちゃんとお口はチャックできてるもんね……ん、はあっ、ふっ……

あー、すっご、トロットロで熱いよ……

おれのちんぼまでとろけちゃいそ……気持ちいい……」

「ミケちゃんの顔、気持ちよさそうだね。可愛い……

あー、顔隠さないで？ ちゃんと見せてよ。

言葉なんかなくても、今ミケちゃんは何考えてるのかわかっちゃうよ。

『気持ち良くてどうしようもない』……あたり？」

「うんうんうんうん？」

んふ、一生懸命うなずいてくれて可愛い……

ミケちゃんもセックス大好きなんだねえ。おれと同じだ。

じゃあたっぷり気持ち良くなっちゃお？」

「ミケちゃん、今おれのちんぼがどの辺まで入ってるかわかる？

ほら、おへその下……この辺だよ？」

「ミケちゃんが一番奥、トントンってノックしてるの……

子宮の入り口狙って、先っぽでキスしてるんだよ。

想像して？

突き上げる度につ、ちんぼでちゅってキスされると……

ゴムがなかったら、そのまま精子注ぎ込んで赤ちゃんできちやうんだ。

ん、くっ……中うねってる……！ ミケちゃん、興奮しすぎだよ。

セックス大好きなんだね……！」

「あー、おれも気持ち良くて……理性吹っ飛んじやいそ……」

「好きだよミケちゃん、好き……」

これからいっぱいセックスして、気持ち良くなるうね？

ん、くっ……はあッ、ミケちゃんのおまんこは喜んでくれているみたい。

仕事のこと、周りのことも全部忘れて、おれと気持ちいいことだけを
追いかけよう？ いいよね？」

「ん、はあ、ああッ！ 中ビクビクしてきちゃったね……！」

もうイキそうなんだ……可愛いイキ顔見せて……！」

イケ、イツちゃえ！」

※絶頂する主人公。

「んあッ……キツッ、締まる……おれも出ちやいそ……」

はあッ、んんッ、出るよ……！」 出る、出る出る出るっ！ あああッ！」

「めっちゃ気持ち良かったよ。おれたち、相性抜群かもね。

これからもよろしくね、ミケちゃん」

【トラック4】

414

場所…主人公の部屋・夜

※主人公の家の戸を叩くタマ。ドアを開けて招き入れる主人公。

「こんばんは、ミケちゃん。何日ぶりだっけ？ 元気そうで安心したよ。

今夜はミケちゃんに会いたいなあと思っ来ちゃった。

入っても大丈夫？」

「もう何度もセックスして、どんどん体が馴染んできてる感じしない？

おれ、昼間別の事しても、ついミケちゃんのこと考えちゃうんだよね。

おれたち、最高のセフレになれそうだよね……」

ミケちゃんも今夜はエッチしたい気分でしょ？」

「今夜は自分で服脱いで見せて？ いい子だからできるよね」

※自分で服を脱ぐ主人公。

「いつもそうやって服脱いでるんだ？ それともおれを意識してる？
焦らしながら脱いでる感じ、めっちゃえろい。興奮する……
下着も脱いで？」

「やらし。裸になっちゃって……」

ああ、ふふっ、だめだよ手で体隠しちゃ。

ほら、手どかして？

言うこと聞けるよね……そう、いい子いい子」

「そのままベッドまで行こうか。手え、繋ご。」

「はい、こっちみて？」

……恥ずかしそうな顔のミケちゃん、すっごくそそる……
おれを興奮させるのが上手だよね」

「おれが部屋に来た時、太ももギュって締めてたでしょ。

ひよっとして、おれの顔見ただけで体が反応しちゃった？

すぐにセックスの準備を始めちゃうだなんて……

猫じゃなくてパブロフの犬なんじゃないの？」

「反応しちゃって可愛いね……」

耳の奥まで舌ねじ込まれて、ジュポジュポ出し入れされるのって
セックスみたいだよな？ ほら、耳奥犯されちゃってる……

恥ずかしいね？」

※主人公「んっ……あっ」

「こーら」

「声が出てるよ？ 我慢して……」

喋らないって約束したんだから。余裕があるなら、舌絡ませて？

ほら、口開けて舌出してごらん。いっぱいエッチなキスしよ……

ツンって尖った乳首、カリカリしてあげるからね」

「ん、ふっ……呼吸荒くなってきた……」

乳首カリカリされるの好きだよね。もう乳輪もふっくりしちやっぺ。顔もとろけてる……あー、エッロ」

「ね、手かして？ ほら——」

※主人公の手を自分の股間に導くタマ。

「ミケちゃんがエッチすぎて、もうちんぽガチガチになっちゃった……おれも部屋に来た時点でちよっと固くなってたけど。」

やっぱり気持ち良さそうな顔見ると、すぐこうなっちゃうな」

「ん、ふっ……はあ、いきなり手動かすの反則っ。

あつ、はあん……ちんぽナデナデしてくれるの？ ふーっ、嬉し。

ありがとね。でもこれ以上されたら出ちゃうってば……

おれも反撃しちやお」

「ちゅっ。ちゅ、ちゅっ……はふ、はあ、ん……」

こら、逃げないの……ん、ちゅっちゅっちゅ……」

※体をよじり、うつぶせでベッドに倒れる主人公。

「あーあ、倒れちゃった……でもこれで逃げられたなんて思わないよね？

ちゅ、ちゅっちゅ……」

背中にキスされただけで体ヒクヒク反応してる……あー、もう我慢できない」

「あー、やっぱりもうちんぽ反り返るほど勃起してた……

わかる？ 足に当たってるでしょ？ 擦りつけちやお」

「ミケちゃんの足でしごいてるみたいになっちゃったね。

ん、熱くて固いの感じる……？

あー、足すべすべでひんやりしてて気持ちいい。

くっ、我慢汁こぼれちゃった……ごめんね？

はあ、ああ、白い足がおれの体液で汚れてるのを見ると……余計ヤバイ。

ね、そろそろこれ、中に入れてもいいよね？
準備するからちよっと待ってて……」

※避妊具のパッケージを破り、身に着けるタマ。

「ふーっ……お待たせミケちゃん」

「うつぶせで寝てるところに覆いかぶさって、ちんぼ入れちやうって。
なんだか無理やり犯してるっぽくて、背徳感じちやうよ……
でもこういうのも嫌いじゃないよ。ん、入り口に先っぽくつついたね。
このまま腰を突き出せば——」

※寝バックの体勢で挿入。

「んっ、はぁ……ゆっくり入ってくね……ん、ふっ。

すっごいキツキツ。包み込んで、握りしめられてるみたい。

気持ち良すぎ……はぁ、ずーっと中に入ってこのまま過ごしたいくらいだ。
ん？ 声出さないように枕に顔押しつけてるの？

えらいね、ミケちゃん。その調子だよ……！」

「ん、ふっ、この体勢っていつも奥に届いてる感じしない？

ほらっ、先っぽ、もう子宮の入り口に届いちやってるっ。

キスどころか、先っぽでごちゅごちゅってこねてるみたいだよね？

ミケちゃんの子宮も、気持ち良くて下に降りて来ちやってるんですよ。

はぁ、はぁっ、ミケちゃんの体がおれに精子注いでほしいって
ウズウズしてる証拠だよ……！」

「ああ、声出したいのに出せなくて、つらいねえ？

しんどいねえ？ごめんねえ、俺のせい……」

「ああ、可愛い……素直で従順なミケちゃん、大好き……！」

はぁ、ゴム有りだけど、

おれの神ちんぽで、このまま奥までぐちゃぐちゃにかき回してあげるからね！」

「ん、ああっ、締まるっ……はぁっ、ああっ。

おれの上に乘られて身動きできないままパンパン音立てて犯されてるのになっ。

すっごい興奮しちゃってるんだ？

ミケちゃんってMなんだね……可愛いね……!」

「ふーっ、ふーっ……じゃあ今度は縛ってあげようか？

目隠しもして……

ミケちゃんがイキまくって失神するまでクリしつこく舐め回してあげる。
立ちバックで激しく犯して、足ガクガクにさせちゃうのもいいなあ。

ミケちゃんが泣きそうな顔でおもらししちゃうところ想像すると、
ちんぽヒクついちゃうよ……」

「ん、おっ、ああっ……んんっ。うねりすぎ……ミケちゃんが喜んでくれて嬉し。

はあ、んん、くっ……どうしょ、精子せり上がって来ちゃった。

はあ、ああ、体よじっても無駄だよ。

おれが上に乗っちゃってるもん……されるがまま、気持ち良くなっちゃえ。
中でビクビクって暴発する感じ、じつくり味わってよ」

※主人公「んあっ、ああっ!」

「あ、んあっ、はあっ……こーら。声出しちゃだめだって言ったでしょ？
声我慢して？ ん、ふうっ、いい子いい子……」

「ん、くっ……あーやば、ごめん……もう出ちゃいそ……!」

出る、出るっ!

あ、ああああっ!」

※絶頂する二人。

「すごく気持ち良かったよミケちゃん……

一つになってるって感じ、大好き。

ミケちゃんがおれのことを受け入れてくれるの、すごく嬉しいよ」

※主人公の隣に寝るタマ。

//SE:シーツが擦れる音

「大丈夫？ ふふ、やらしー顔になってる。ぼんやりしちゃった？

まだ一回イツただけなのに。気持ちいいことにヨワヨワすぎ。
そこが可愛いんだけど」

「でも、エッチしてる間にいっぱい声出ちゃってたよ？
声我慢しなきゃだめでしょ？ 喋らないって約束したんだから。
もう一回する時は、声出さないようにね？」

※主人公「そんなの無理だよ……」

「えっ……」

「ミケちゃん……今喋ったでしょ？ それどころか、無理だよって言った？
おれが言った言葉……否定、したよね？」

「だから喋るなって言ったんだよ……
ふ~~~~~」

絶対に喋らないようにって約束、したのに。なんで守れないの……
なんで言うこと聞けないの……なんでおれが言ったこと否定するの？」

※主人公「ごめんなさい、私——」

「だから喋るなって言ってるだろうが……！」

「ああ、ごめん、ごめんねミケちゃん……
怖がらせたいわけじゃないんだ。
でもどうにもならない……頭の中ぐちゃぐちゃで……
今説明するから、黙ってて」

【トラック5】

場所…主人公の部屋・夜

601

※4の続き。ベッドに座った状態で向かい合う二人。

「ああ~~~~~」

もう、何もかもおしまいだよ……せつかく居心地のいい場所を見つけたのに。ミケちゃんとならうまくやれるんじゃないかって思ってたのに。

また、全部おしまいになっちゃった？

どうして喋っちゃったんだよミケちゃん……!」

「だめ、喋らないで。どうしてとか、何があったのとか聞きたくない。何も言わないで。今ちゃんと説明するから待ってて!」

「ああ、ミケちゃんはいいい子にして待っててくれてるよね。

ごめん、おれが落ち着かなくちゃ……」

「おれはね……拒否されたり、拒絶されるのがどうしても怖い……悲しい気持ちと怖いって気持ちが発発して。

そのあとどうしようもない怒りがお腹の底から湧いてくるんだ……」

「その、む、無理、とか……嫌、とか……」

(気分悪くなり) うっ、……ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ」

「はーっ、はーっ……その言葉だけで、体の中全部をかき回されてるような気持ちになる。昔からなんだ……自分じゃどうにもならない。

嵐のような感情が吹き荒れて、制御できなくなっちゃう……」

「セックスして、繋がってるっていう安心感と愛されてるっていう充足感があればなんとかなるって思ってたんだけど。難しかったみたい」

「大事だなんて思ってる子ほど、それを言われたら、耐えらんない……。

異常……異常、だよ。おれもこんなおれのこと、今すぐやめたい」

■立ち位置① (下を向いて)

「なんでそんなふうになっちゃったかなんて、おれにだってわからないよ。わかんないんだけど……ちよっと自分の話、していい？するね、します。」

「小さい頃に親が離婚して、どっちもおれを欲しがらなかったから、親戚の間中をたらいまわしにされたんだよね。

居候の身で、同じ食卓で食うとか……音を立てるとか、よく言われた。」

「とにかく否定されるのが怖かった……
明日には眠る場所がなくなるんじゃないかって
毎日ビクビクしながら過ごしてたよ」

「でもね、そんなのは大人になったおれが今、

『ああ、これが原因かもね』って勝手に考えたことだから。

真実なんて何もわかりはしない。

おれだつてわかりたいと思わない。

ただこの感情がなくなればいいのにな、って考えてるだけ……」

「ミケちゃんと出会った日、なんで雨の中で立ってたか聞かれたよね。

本当はさ、おれ居候させてもらってた女の子に「無理」って拒否されて。

思わず手が出そうになっちゃったんだよね……」

「なんとかこらえて、その子に怪我させちゃうことはなかったけど……

おっきい声出して怖がらせちゃったし……

最低つて怒られて追い出されちゃった……」

「ごめん、怖いよね。おれも正直、自分のことが怖い……」

「ミケちゃんを一目見た時、優しそうな子だつて感じて、甘えちゃった。

笑った顔がお花みたいにかわいくて、

ほんものの、大切な子だつてすぐにわかった。」

「……だから絶対に傷つけない、失いたくないって思ったんだ。

喋らせなければ、おれが混乱して傷つけたりしないはずだったのに。

このルールを思いついた時、おれ天才じゃねって思ったんだよ……？

約束を破るなんて……ミケちゃんはおれと一緒に居たくなかったの!!」

※主人公「ち、違——」

「また否定した……否定ばかりだねミケちゃん……許さない。

もうめちゃくちやになっちゃえばいいんだ……」

「ミケちゃんのこと、おれが壊してあげる……」

【トラック6】

680

場所…主人公の部屋・夜

「おれとの約束を何度も破っちゃうミケちゃんには、お仕置が必要だね……」

「ん、ちゅ、はふ、今また何か喋ろうとしたでしょ？」

だからダメだって言ってるのに……！！

はあ、ふっ、やめても、嫌も、絶対言わせないよ？」

「わかった？ わかったらうなずいて？」

※必死に頷く主人公。

「必死にうんうんって頷くだけなら可愛いのに……」

そう、いつだって従順でいなきや……！！

なんでわかんないかなあ。

ミケちゃんは頭に近いお口よりこっちのお口のほうが

よーく理解してると思うよ？」

※主人公の性器に触れるタマ。

「ほらね？ ここは触れば素直にエツチな音を出すだけ。

拒否したり否定することもない……」

おれの指も簡単に受け入れて啞えこんでくれる……」

「キュウキュウ締め付けてる。ちんぼだと思ってるの？

おれのこと否定しておいて、甘々にちんぼ入れてもらえろと思ってるんだ？

ワガママだね、ミケちゃんは！

壊されてもいいんだ？ めちゃくちゃにしてあげるよ！」

「だから声出すなって言ってるんだろ。

黙ってるよ……ん？ それもできないの？ そう、そのまま……喋るなよ」

「ちゅ、はっ、はあっ、ああ、だらしなく足開いて……」

おまんこぐちやぐちやにされて喜んでるんだろ？
ドスケベだなあー。

そういうえば最初っからセフレの提案に、ソッコー頷いてくれたもんね？
今だっつてっ、おまんこかき回されながら喜んでるんじゃないの？
ほら、いじりやすいようにもっと足開けよ……
お腹撫でてもらう動物みたいに、情けなく腰へこへこできるだろ？」

「あー、可愛い。腰へこして、おれの指に媚びてんの？
目閉じんなよ……ちゃんと目開いて。おれのこと見てろ。

そのまま……おれのこと見ながら腰振れ……
ああ……荒い呼吸で泣きそうな顔してんのに、腰だけ夢中で動かして……。
スケベすぎ……たままないわ……」

※主人公「んんっ！」

「だーからー。何度喋んなって言わせんだよ。
喘ぐのももう禁止……どんなに気持ち良くても、歯食いしばって声我慢して。」

「はあ、ああ、いいね……唇噛んでるのに。
喉の奥からキューキュー子猫みたいな声漏れちゃってる。
悲鳴みたいで、ゾクゾクしちゃう……！」

「んっ、腰の動き激しくなってきた……何、もうイツちゃうの？
口押さえられて、おまんこぐちやぐちやにされながらイケちゃうんだ？
ドスケベミケちゃん、イって？腰へこしながらおまんこイツちゃえ……！」

※絶頂し、潮吹きする主人公。

「潮吹きしちゃった……おまんこかきまわされて、おもらしとか。
ミケちゃん、変態すぎ㍗」

※ベッドに仰向けに倒れ込む主人公。

「ねえ、誰がベッドに寝転んでいいって言ったの？
勝手なことするなよ……まあいいや。そのまま仰向けでいて。」

口開けて……早く」

※主人公の顔をまたぐ体勢になり、見おろすタマ。

「さつき出したばっかりなのに、ミケちゃんがエロくてまた勃起しちゃったよ。カリも膨らんで先っぽから我慢汁も出てるでしょ……これ、しゃぶって？」

「おれのこと気持ち良くできるよね？」

自分ばかり気持ち良くなっておもらしして、

はいおしまいだなんて言わないでしょ？ ほら、さっさと啜えて」

「はあ、いい……口の中トロットロ……」

すっごい熱い……歯は絶対立ってないでね？ ちゃんとおしゃぶりして」

「ん、ああっ……上手だね、舌先でチロチロ舐めるの気持ちいい……でもそんなんじや満足できないんだけど？」

唇すぼめて、ジュポジュポ音立てながらピストンしてよ。

お口おまんこになるんだよ！」

「カリ首のところまでしか口に入っていないじゃん。

根元の奥まで啜えろって言うてるの……!!」

※腰を動かし、主人公の口内へ挿入するタマ。

「ん、おおっ……喉の奥柔らかっ……」

急だったから喉奥開いたままだったんだ？

おれとしては好都合だけどね……!!

はあ、柔らかくてあったかいとこに先っぽ擦りつけるから、そのまま口開けといて」

「何、オエってなってるの？ 我慢しろ。

おれのちんぼしゃぶることだけに集中するんだよ！

ほら、しっかり吸い付いて、舌動かせよ……!!」

「仰向けだからっ、苦しくても頭引いたり逃げらんないねえ？
すご、精子せり上がって来ちゃった……」

金玉持ち上がったってきた……ふーっ、ふーっ……
喉の奥に思いっきり射精していいんだよね？
くっ……イヤイヤって首振らないでよ……！！
ちんぼケースなんでしょ？ 喉の奥に流し込んであげるからな……！！
全部飲んで！ くっ、出るっ、あっ、あああっ！！」

※射精するタマ。

「めちゃくちゃ出てるっ……んうっ。はーっ、はーっ、ビュクビュク出た……
喉に直接流し込んでやったんだから、こぼさないで……！！」

※咳き込む主人公。

「あーあー、せっかく口の中に出してあげたのに、
咳き込んだら吐き出しちゃうだろ！ 何やってんだよ……！！」

※泣き出す主人公。

「っ……！！ごめん……泣かないで。
泣かせたいわけじゃないんだ……
だって、ミケちゃんが約束破って喋ったから、これは罰で……
おれは悪くないだろ？ 悪くないよね？
泣いてないで、領けよ！」

※びくっとして頷く主人公。

「まただ……ごめんね。怒鳴って怖がらせちゃった。
泣かないで……今度はおれの番。ちんぼいっぱいしゃぶってくれたから、
おれが気持ち良くするからね……嬉しい？ ミケちゃん泣き止む？」

※主人公の足元へ移動し、性器に触れるタマ。

「さっきより濡れてる……
苦しそうにしたのに、ちんぼしゃぶりながら興奮してたんだ……
やっぱりスケベだ……クリも割れ目から飛び出すくらい大きくなってる」

「ここ、触ってほしそうにヒクついてる……指で潰すみたいにごねてあげるよ」
「クリ、敏感なんだ……こねてるだけで腰浮いてるじゃん……
皮剥いて、プリプリクリを擦ってあげる……シコシコ、シコシコって。
ちんぼしごくみたいにされてるよ……腰ヒクついてる……エッロ」

※主人公「あつ、ああつ♡」

「だーから！ 何度言えばわかんの。声出すなって……！！
甘々の声出してもダメなんだよ！ おれの言うこと聞いてよ！
これから何されても絶対声出さないで」

「クリ充血して濃いピンク色になってる……
びしょ濡れで、光ってるよ。グミみたいで美味しそ。
はーっ、割れ目もパツクリ開いてるし……
ここ、おれにしゃぶってほしいんでしょ？
クリに吸い付いて、ジュルジュル吸い上げてあげる」

「ん、また腰へこへこ動いてる……舐めづらいから動くなよ。
あー、クリおつきくなってる……まれじやクリちんぼだね……
こんな勃起クリ舐められて恥ずかしくないの？
ふうっ、その泣きそうな顔……ちんぼに響く……」

「くっ、また大きくなってきたじゃん……
責任取れんの？ 問答無用で責任取ってもらうからね……
んん、ふうっ、何、もうイキそうなの？ まだ我慢して……！！」

※絶頂する主人公。

「はーっ、はーっ、まだオツケー出してないのにイクとか……
あり得ないでしょ。イクなって言ったじゃん！
なんで勝手に気持ち良くなって、おまんこヒクヒクさせてんの！
ん？ 舐めるだけじゃ物足りないから、奥までちんぼ入れて
がむしゃらに犯してくださいって言うてんのか」

「おれ、ミケちゃんのこと好きだったのに。」

他の女の子とは違うんじゃないか、
おれのこと理解してくれるんじゃないかって思ってたのに。
結局、約束は破るし。

気持ちいいことが好きなだけで、おれのことなんかどうでもよかったんでしょ」

※主人公「好き、だよ……」

「喋るなって言っただろ……！　今、好きって言った？　おれのこと好き？
どうせその場しのぎの言葉なんだろ。

怖くなったり面倒くさくなったら、おれから離れるくせに！
適当なこと言うなよ！

本当に好きならさ……生で入れてもいいんだよね？
腰持ち上げて？　一番奥まで届くようにねじ込んであげるからさ！」

※主人公の腰を持ち上げ、種付けプレスの体勢で挿入。

「ん、あぁっ……めちやくちや締まってる……

やっぱりちんぽ入れてもらうの待ってたんでしょ？

抵抗できない状態で、ぐちゃぐちゃにかき回してほしいんだもんね!!」

「腰無理やり持ち上げられてっ、釘打ちピストンされてっ。

完全に種付けされちゃってるね……！

ゴムもつけてないから、今射精すれば、

ミケちゃんの中に精子ぶちまけちゃうんだよ……！

どうする？　赤ちゃんできちやうかもね……！

ミケちゃん、さっきから気持ち良すぎて子宮降りて来ちゃってるから、
受精待ったなしじゃないの？

おれのせいじゃないよね。ミケちゃんが悪いんだよ……！

そうでしょ！」

「くっ、んあっ！　ああ、なんでそんなに泣きそうな顔してんの……？

おれと生セックスしてんのに、嬉しくないの？

おれのこと好きなんでしょ？　嘘ついたの!!」

「いや、違う……違う……ごめん。

泣かせたいわけじゃない。

気持ちが悪くちやぐちやなんだ……

自分でももう止められない……!!

気持ち良くて、腰も勝手に動いちゃうしっ。

ミケちゃんのこと手放したくなくて……無理やり犯しちゃってるっ!

ごめんね……嫌いにならないで……!!」

「おればっかり気持ち良くなってる。

ミケちゃんのこと気持ち良くしたいのに……!!

はあ、ああっ、ミケちゃんもちゃんと気持ちいい?

いいよねっ? だって、おまんこさっきからずっとうねってるもんね……!!

ほら、精子頂戴って言ってるんでしょ!!」

「もう出ちゃうっ……中に思いっきり出すからね!

おれの精子たっぷり注ぎ込んであげる……!! はっ、んんっ!

出るっ、出る出る出るっ! ん、あああっ!」

※射精するタマ。

「これで終わると思った? 終わるわけないでしょ……!!

はあ、どう? 熱々精子がおまんこの中にトクトクって注がれちゃったね。

お腹の奥でちんぽが跳ねる感触、いつもより感じられたんじゃない?

嬉しいね? おまんこも喜んでるね?

おれも嬉しいよ……!! ミケちゃんの中に中出しできたんだもん。

これでおれたち、もっとわかりあえるようになるよ……!!」

「そろそろ腰上げたままで突き上げられるのしんどくなってきた?

じゃあ普通の体勢にしようか?」

※正常位の体勢になる

「はあ、んんっ! おれもこの体勢のほうが腰振りやすくていいや。

顔も見られるし、いつでもキスできる……!!

ミケちゃんが余計なこと喋りそうになったら、キスして舌噛んであげるね?

噛みちぎられたくなかったら、声は絶対我慢しなきゃね?」

「おれはね、今まで散々、愛される努力はしてきたんだよ……!! 否定されないように、頑張ってきた。もう充分すぎるくらい! だからさ、今度はミケちゃんがおれに合わせてよ。おれが怒ったり泣いたりしないように、喋らずにおれを受け入れて! それくらいできるでしょ?」

「ミケちゃん……!! ミケちゃんミケちゃん……!!」

「はあ、はあ、おれが何をしても、どんな状態になっても愛してよ! おれ、もうミケちゃんがいなきや生きていけない。

どうにかなっっちゃうよ……!!」

「ねえ、お願い……一生おれのそばにいて……!」

「おれはミケちゃんに最高に気持ちいいセックスをあげる。

「ミケちゃんが喋らない限り、おれがトロトロに甘やかしてあげるから!」

「ん、ふーっ、好き……好き好き……」

「くっ、はあっ、ああっ。ミケちゃんの中、うねってる……!!」

「精子注ぎ込まれて喜んでんの?」

「それともっと頂戴っておねだりしてんの? ふー、はあっ。

「ドスケベだね……!! ああ、好きっ。大好き……!!」

「んんっ! さっきから何度も甘イキしてるでしょ……」

「はあっ、ああ……このまんこ具合良すぎる……」

「ごめん、ごめんね、気持ち良すぎて、優しくできない……っ

「ああ、んん……っ、も、イク……!!」

「はあ、はあっ、一緒にイク……!!」

「また中に出すよ……出るっ、出るっ!」

※二人絶頂する。

「おれの精子、また中に入っちゃったね……」

「これで少しはおれの気持ちかわかるようになるでしょ?」

「ミケちゃん……大好きだよ。おれのこと悲しませないようにしてね?」

【トラック7】

※6の続き

「ミケちゃん、口開けて？」

ほら、ぼんやりしてないで。舌突き出してごらん」

「はあ、はあっ、ふっ、顔トロツトロになってるじゃん。

ねえ、そんなに気持ち良かったの？

おれとの生ハメ、最高すぎてとろけちゃったんだ？

もうミケちゃんもおれから離れられないってことだよね……？」

「こんなおれでいいんだね……どんなことをされても、どんな扱いを受けてもおれを捨てることなんかできないんだ……」

「やっぱりミケちゃんは他の女の子とは全然違った。

おれの運命の相手なんだ……おれのこと、たっぷり甘やかしてね？

おれもミケちゃんのこと甘やかして溶かしてあげるから」

「おれたちの関係、他人が見たら変だとか否定するかもしれない。

でも、そんなことおれには関係ないよ。

ミケちゃんがおれのそばにいてくれて、黙って愛してくれるなら……

穏やかに生きられると思う」

「どこまでも一緒だよ？ おれから離れられないミケちゃんと、

最悪なおれ……地獄まで手をつないで逃げられたらいいのになあ。

そこまで落ちたら、きっと幸せになれるよ……」